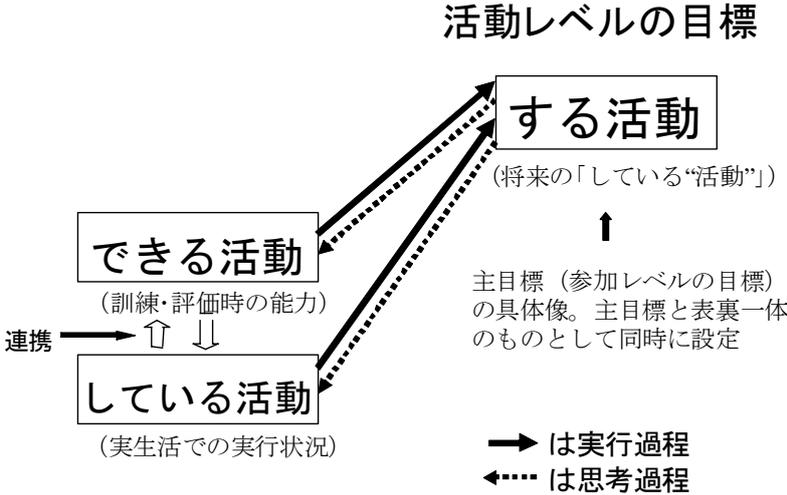


目標指向的活動向上プログラム



目標指向的活動向上プログラムは、目標である「する活動」向上にむけて、実生活での実行状況である「している活動」と評価・訓練時の能力である「できる活動」を向上させるものである。「している活動」と「できる活動」に対応して結果的に到達させるものではない。

なお「する活動」は目標指向的アプローチの活動レベルの目標に他ならない。

“活動”は単なる自立度（自立、半介助、全介助、等の）程度ですませるのではなく、どのようなやり方（姿勢、補助具、介助法、等）・手順で行うかまで、細部にわたって具体的に評価し、目標として定める。

中高年の生活に関する継続調査票（1） － ICF 分類との対応－

本調査は、平成17年度を初年度として、調査開始時の団塊の世代を含む全国の中高年齢世代の50歳から59歳の男女の追跡、その『健康・就業・社会活動』について、意識面・事実面の変化の過程を継続的に調査し、行動の変化や事象間の関連性等を把握し、高齢者対策等厚生労働行政施策の企画、実施、評価のための基礎資料を得ることを目的としている。

調査時点での必要性に重点が置かれているが、ICFの項目との対応の観点からみていくと次のようである。

1. 全体

- 1) 調査項目は主に「健康状態」と「活動」のうちセルフケア（a570以外）と、特定の「参加」※及びその特定の「参加」に関係の深い「環境因子」・「主観的因子」（価値観、希望など）に対応する。

※特に仕事（p840-p859）、対人関係（p730-p799：家族、同居人）、他者への援助（p660）、コミュニティライフ（p910）、レクリエーションとレジャー（p920）

- 2) 「活動」の項目が少ない

- 3) 「心身機能」の項目も少ない（しかし、これは当事者での判断には限界がある）

- 4) 各要素間の相互関係

- ・活動低下の理由（健11-2）は病気中心であり、「心身機能」は「8. 視覚・聴覚障害」のみ。しかし実は様々な心身機能が関係している。また、その心身機能低下は特定の疾患によるとは限らない。

2. 「活動」

- ・セルフケア（5章）と運動・移動（4章）の一部（a410、a430、a450、a455）と運動の強度（問15）に限っている。
- ・日常生活上の「何らかの困難」の介助の必要性でみている（補11-1）。
- ・交通機関利用（a470）、自動車運転（a475）のような項目も重要であるが含まれていない。
- ・家事、仕事、スポーツ等も「活動」が困難なため制約されることが多いが、これらは現在は該当項目はない。

また「活動」でも、「参加」レベルとの関係は深いですが、その関連をみるものはない。

- ・活動項目の問11の選択肢は、何らかの困難はあるが、「独力で“できる”」となっている。“している”がより適する ⇒ 活動の実行状況（している活動）と能力（できる活動）の区別は重要。
- ・各項目の定義は明確にしていく必要あり（例：活動の基本となる「歩行」について定義を明確に。例：屋外歩行、屋内歩行の別、またトイレにも排泄行為のみか、トイレまでの移動を含むかの別を明らかにする、等）

3. 社会活動（問 32、33）などのように一項目で広い範囲の異なる内容の項目を包含しているものがある。

例：社会参加活動（問 32 では地域行事、ボランティア、高齢者支援等を含む。しかし、問 33 では地域行事と高齢者支援は別項目。このうちボランティアはp855：無報酬の仕事にあたるが、問 32 では無報酬の仕事は別項目※としてある。）

※問 32 「無報酬の仕事（民生委員、保護司、PTA 役員等を含む）」

この他、家の中の役割（p640：調理以外の家事、p650－p669：家庭用品の管理および他者への援助）、生涯学習（p810－p839：教育、等）等も重要だが含まれていない。

4. 健康状態

健康状態は生活習慣病を中心としており（問 8）（糖尿病、心臓病、脳卒中、高血圧、高脂血症、悪性新生物（がん）、これらの診断の有無等は把握される。

他疾患については、

- i) 「病気やケガのための入院」の有無と、
- ii) （補問 11－2）「日常生活活動の際に困難」を生じることの原因となる理由として関節疾患（関節リウマチ等）、骨折・転倒、その他、のみ

5. 評価点：活動：「日常生活活動の際に困難（問 11－1）」は以下の 3 段階

- 「困難なし」（回答なし） ー 評価点 0、1 の混在※
- 「何らかの困難はあるが、独力でできる」 ー 評価点 0、1 の混在
- 「独力ではできないので介助が必要」 ー 評価点 2、3（「4：実行していない」が含まれる可能性あり）

※自立を評価点「0：普遍的自立」、「1：限定的自立」を分けることは、低下の鋭敏な指標となる

中高年の生活に関する継続調査票(2)
 - ICF分類と調査項目との対応 -

<凡例>

- (家)(健)(就)(資)(社)(住)(配)は調査票の区分(楕円でかこって表示)。
 それぞれ家族(問1-6)、健康(問7-17)、就業(問18-29)、資格、能力開発等(問30-31)、社会活動等(問32-33)、住居・家計(問34-38)、配偶者(問39-42)を示す。
- 「環境因子・個人因子、等」の欄には、調査票の項目が活動または参加のICF項目に対応する場合に關係する因子を示している。<環>はICFの環境因子、<個>は同じく個人因子、<主>は生活機能の主観的側面、<三>は第三者の生活機能を示す。
- *印は複数の項目に關係するもの。右向き矢印(→)の先にそれ以外の項目を示す。
- 左向き矢印(←)は關係の深い参加項目を示す。

健康状態			
(健)7 [現在の健康状態はいかがですか?] *(健)8 [6疾患の有・無、通院や服薬、病状の変化、最近1年間の入院] →p570 (健)9 [最近1年間の入院(原因8以外)] *(健)10 [主観、情動、神経症状] →心身機能 b126、b130 →<主> (健)11-2 [日常生活活動の困難の理由] (疾患名中心、心身機能は視覚障害のみ) *(健)16 [健診受診状況] →p570 *(健)補 16-1 [健診の結果] →p570 *(健)補 16-2 [結果への対応] →p570 *(健)17 [健康維持のための心がけ] →p570			
活動		参加	環境因子・個人因子、等
5章セルフケア			
(健)補 11-1-⑤ [手や顔を洗う]-a5100 (困難の有無、介助必要性のみ)	a510.	自分の身体を洗う	
(健)補 11-1-⑧ [入浴]-a5101 (困難の有無、介助必要性のみ)	a520.	身体各部の手入れ	
(健)補 11-1-⑦ [排せつ] (困難の有無、介助必要性のみ)	a530.	排泄	